

日中相変わらず暑い日が続く中、朝夕には確実に涼しさを体感できる日々となりました。信じられないかもしれませんが、15年位前までは、お祭り前後には（9月23日）、冷え込みが朝晩厳しくなり、どこかの家も、炬燵を入れるのが定番であり、お祭りには、暖かいダウンや毛布を持って、神社へお獅子を見に行ったものでした。

こんな亜熱帯化した日本そして大地でも、ほぼ季節通り、リンゴが色づき、稲が黄金色になる風物詩は変わりません。子どもたちがいち早く季節を先取りするのは、何でしょう？ それは スロープの栗です。それは、子どもたちが大人よりもいち早く、見つけます。そして、生栗をそのまま食べます。未満児の子ども達も、皮そして渋皮を剥いて、その大切な栗を愛おしく食べるのですから、まさに秋到来といった感じです。栗の木の下が、栗のいがでいっぱいになり、それが綺麗にかたづけられるのは、2週間足らずでしょうか。そう考えると、栗の季節も短いものです。

味覚の秋は、何といっても子どもたちの魅力の秋でもあります。大地ほど、味覚を楽しめる所は、他に類はないでしょう。先日のフィッシュ&チップス。ジャガイモ掘りから楽しみしていたポテトチップス。当日は、おおぞらさんが、全てパンからポテトまで準備してくれました。そして、問題のポテトチップス。ジャガイモ30個近くを切り、大鍋で2回に分けて揚げ続けました。一回目は、冷たい油から揚げるので、約40分以上はかかります。お店並の大量の油（大地では、生活クラブの油を惜しみなく使います）を大鍋に入れ、竈で強火で揚げます。猛暑の中、竈で揚げ続けるのは辛いですが、大量のポテトチップスが新聞紙の上に揚がる光景は満足そのもの。ここに、天草の塩を振りかけ、新聞紙の中でシャッフルして、つまみ食いする瞬間がたまりません。世界最高のポテトの完成です。さすがに、この日の給食は、誰も残さない最高のフィッシュ&チップスとなりました。味覚の秋。大地ならではの秋を 十分考え 楽しんで行きたいと思っています。



【大きい空】

粉を計り、捏ねて、成形し、カミソリ 油 豆乳を塗り、石窯に火をつけ、時計を見ながら パンを焼き上げる。帰りの会、年少児のお昼寝前に、手遊びやわらべ歌をして、絵本を読む（絵本の読み方を自主的にノンタン母に学ぶ）何かしてもらう、頂いたお礼に、お金などで感謝を考えるのなく、自分の特技や創造力を使い、それで感謝を表す小さい子のおむつや下着交換や着替え、トイレでの介助、食事からお昼寝の寝かしつけまで、細かいお世話をする給食や調理の時の準備においては、どこに何があるか把握し、片付けは、完全に、乾燥 収納までおまかせできる登山自転車運動などにおいても、大人以上のことを、楽しく朗らかに、友達と、そして 単独孤独でもやり遂げる幼稚園時代と変わらずに、手遊びやわらべ歌などを楽しみ、メルヘンとファンタジーの世界を楽しんでいるもちろん、大きい子どもたち（9歳以降）の世界も自分達で築いて、午後は、自分達で遊びや世界を作り上げるポケットフルーツを練習し、スタンプ同様、片付けや昼食時に、これを鳴らす事に、誇りと楽しみを持っている自分のやりたいこともしっかりと訴え、幼稚園の活動に入りたい、自分達だけでやりたいなど、自由に世界を選択する意思を持っている全てに、おおらかであり、面倒くさいという言葉もなく、気持ちよく、生活や人生を引き受けてくれる自分達の大きいこと 特権などを自慢したり、ひけらかしたりしないで、心が広い

中村桂子コレクション4巻 はぐくむ にある やかまし村 の世界 が大地に理想的に出来上がっている。（スタッフの関わりなどの姿勢 力量が 現代では重要かつ大切であるが）

※中村桂子曰く（中村桂子コレクション第4巻 P47 子ども社会の創造性）

子どもだけで遊びほうける世界はなくなり、子どものいる所つねに大人ありというのが現代。大抵は、大人付き。大人が準備した場所に、大人と一緒にいっても子どもの世界にはならない。子ども社会のない社会は、社会全体として創造性に欠けた、活気のないものになってしまう。もちろん、大人との接触も重要であり、そこから子どもが多くを吸収していくのは当然です。しかし、どうも、現代社会の大人は、子どもとの接触が上手とは言えないようです。実はこれは 子ども離れできない大人の問題です。子どもの社会は子どもに委ねる決心が必要です。（これは 大地でも反省し 気をつけるポイント）

大地のおおぞらさんが始まって（アゲミは別として）、8年位になり、ようやく手応え実感として捉えられるようになってきたこと。それは、継続して9歳までの暮らしや原体験、心のあり方などは、ようやく 9歳過ぎに 自分のものになり、それを確実にしかも自然に暮らしに表現 体現できるようになる事。

9歳までは夢の中 を信じて、卒園しないで、幼稚園の子どもたちと過ごす。目に見える学習、文字算数などはなく、傍から見れば、勉強という小学校の要素がなく、ただただ遊び呆けており、目に見える成長や手応えを感じにくい日々

そして、最近 私が学んだこと、気づいた事。今 ブームの森の幼稚園。火を焚いたり、調理をしたり 木登りをしたり、自然体験をしたり、登山や川遊びをしたり。大地も、創業以来、時代に先駆けて 幼児時代にこんな体験をさせようとして やってきました。しかし、その体験は 大人が準備したものであり、子どもたちが、卒園してから継続的に発展させ、日常の暮らしに自然に生かされてきたのか、生かされているのか。たった2、3年の幼児時代で、その根本的なスキルや基礎が出来上がるのか？ と疑問に思えてきました。これに気づいたきっかけは、まさに 今のおおぞらさんです。9歳過ぎに、それまでの継続性が開花するのではないかと。

逆に言えば、最低幼児時代を含めて、六年間は 必要ではないかと言うことです。シュタイナー教育の7年周期のなかで、9歳の危機 と呼ばれている時代。ここを、乗り越えた時の姿、幼児期の次にくる学童期の重要性、この時期の権威の必要性など。

大地時代の三年間に、火起こしや自然体験やそこでの技術的なスキル習得の体験などを遮二無二に子どもたちに与えても、それは大人の満足であり、子どもたちにとって一生の財産になるのか、それはもしかすると、もうちょっと時間が必要なのでないか、それよりも 情緒的芸術的な体験 絵本やおはなしなどのファンタジーの世界のほうが、その後の人生のベースに、幼児時代の体験として比重が高いのではないかと。先の子どものいる所に常に大人がいるという点では、絵本やおはなしは、必ず大人がいないと成り立たない（幼児時代）が、その他の世界は、余りにも大人が準備しないと、大人が安全管理しないと、幼児時代は成り立たない。そうすると、子ども社会の保証は、どこでできるのかと。

もちろん 大地を含めて教育現場では、安全管理が最重要で、子どもたちが安全に過ごせるように、大人が管理することが必要で、何かあると管理責任が問われます。だから、大人が必ずいなければならない（責任追及をされたくない、責任を持ちたくない大人が、巷に溢れています）でも、子ども社会（大人がいない世界）を保証するには？と悩む。

このヒントは、今のおおぞらさんが教えてくれます。昔の原っぱで子どもだけで遊びほうけていた時代には、必ずガキ大将つまり経験歴の長い先輩が必ずいたのです。その子がリーダーとなり、子ども世界の秩序を示し を安全に管理し、統制し、子ども社会を作っていたのです。そして、大人も、安心して子どもに委ねていたのです。

現代社会での人間の各成長過程における精神性の低年齢化の中、幼児時代は（3歳から9歳まで）の六年間を、メルヘンとファンタジーと大地時代で継続的に過ごしてみませんか！！